

## I 図画工作科 研究テーマ

表したいことをはっきりと持ち、「学びのものさし」を活用しながら表現を工夫していく子どもを育む学び

## II 研究の重点

形や色などに着目した「見方・考え方」を働かせながら、表現や活動を工夫していく子どもを支えるための手立て

## III 3年次の成果と課題

### 1 成果

#### (1) 自然に鑑賞が生まれる場の工夫

2年次では、鑑賞を通して得た「見方・考え方」が、その後の表現に生かされることを目指し、授業実践を行ってきた。例えば全体で意図的に子どもの作品を取り上げ、表現の意図や効果について話し合う活動である。これには一定の効果があったものの、子どもの表現活動の流れを止めてしまうことにもなった。そこで3年次では、活動の流れに沿って自然な形で行われるように、場の工夫を実践した。

1年「ふしぎなせかいでみつけたよ～くものって～」の題材では、学習形態をグループの形にした。ある程度表現を進めて、活動が止まっていた子どもが、教師と向かいの友達との対話の様子を見聞きして、自分の表現に取り入れようとする姿が見られた。また、グループで向かい合っていた子ども二人のうち、一人はお菓子の世界を、もう一人は遊べるところがたくさんある世界を想像していた。互いに「ここは…な場所だね」「このプランコは…」などと自分の想像した世界を語り合うことでさらに想像が膨らんでいくという様子であった。近くのグループの友達が渦巻き型の雲を作っていた様子を見て、自分でも作る子どもが現れるなど、自然に鑑賞と学び合いが生まれ、表現の自己決定に刺激を与えていたと言える。

子どもが自らの目的に応じて自由に使える白画用紙を教室前方に置くという場づくりも行った。子どもたちは、紙を取りに移動する間に、他のグループの友達の作品を鑑賞したり、友達と対話したりしていた。

このような場の工夫の成果として、子どもが必要としている造形的な気付きを、その子にとって必要なタイミングで得られたことが挙げられる。子どもの表現活動の流れを止めることなく、自然な形で発展させていくために、学習形態や場づくりといった工夫が有効であったと考える。

#### (2) 表したいことを見付け、想像を広げるための子どもとの対話

2年次から継続して、子どもとの対話を大切にした実践を行ってきた。具体的には、子どもが想像したことを聞き出すような問い掛けを行ってきた。教師の問い掛けに応えながら、自分の中で物語を作るように想像を広げる子どもの姿を見て、問い掛けそのものが子どもが表したいことを見付け、想像を広げていくための手立てとなることを実感してきた。

3年次でも、1年「ふしぎなせかいでみつけたよ～くものって～」の題材において成果を得ることができたと考える。学習が始まって間もなくは、「雲に乗ってどんな世界に行きたいかな」「何をみたいかな」といった問い掛けに、反応が鈍い子どもたちであったが、「雲にどんなポーズで乗りたいの」「誰と行きたいの」など、自分を主人公として考えることを促す問い掛けや、「これはどんな○○なの」「どんなところが不思議なの」などとより詳しく想像することを促す問い掛けから、子どもが自分なりの物語を紡いでいく姿が見られた。

画用紙に花をいくつか描いた後、活動が止まっていた子どもには、「雲の上のお花なんて、素敵だね」と共感の言葉掛けをすると、他にも花を描き加えていく姿が見られた。色とりどりの花が咲く空の世界という想像がさらに広がり、自信をもって表現し始めた姿と言える。

このことから、子どもが表したいことを見付け、想像を広げるために、教師が問い掛けたり、表現に共感する言葉掛けをしたりするという対話の在り方が有効であったと考える。

### 2 課題 造形的な視点を意識した手立て

3年次までの鑑賞と対話の成果は、子どもが表したいことを見付け、想像を広げることにつながったことだと言える。しかしそのことに留まり、造形的な視点で子どもの表現力を育むことまでは至らなかったと考える。鑑賞や対話をする際の、「形や色、奥行き、バランス」などの造形的な視点に基づいた問い掛けや、子ども同士の学び合いの場の設定など、表現を工夫していく子どもを育むための手立てを探っていきたい。